
春待ちの闇

風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春待ちの闇

【Nコード】

N58640

【作者名】

凧

【あらすじ】

「太陽」と呼ばれる国の、小さな村で育ったセシリア。ある日村の祭りですう花を摘みに、入ることを禁じられている森へ入ってしまった。

しかしそこで、偶然居合わせた男に無理矢理連れ去られてしまう。連れてこられたのは暗く、重い霧の城。怯えるセシリアに男は言った。

「そなたは私の妻となる」

春は去り、冬に帰る 1

セシリアが一步踏み出す度に簡素な白いワンピースは、草花と共に風に揺れた。

腰まで伸びた亜麻色の髪は空気を孕んでふわふわと風に靡く。村の娘の殆どは王都の流行を真似て髪を束ねているが、セシリアはこうして風に髪を遊ばれるのが好きだった。

見渡す限り、淡い花に彩られた草原は春の香りに満ち溢れている。ケンテイフォーリア国が「太陽」と呼ばれる所以は、冬が他の国々に比べて短く、一年を通して温和な気候に恵まれているからだ。隣国との国境に程近いセシリアの村でもようやく雪が解け、柔らかな太陽の光が村全体に降り注いでいた。

春の訪れを祝う祭りも3日後に迫っており、いつもは静かなこの村を活気づいたものにさせている。

この時期、年頃の娘は競うように花冠を作り始める。その年村で一番の花冠を作り、神に奉納した娘には春の女神から祝福が贈られるという古い言い伝えが残っている為だ。

順位自体を決めるのは昔神殿で巫女をしていたと噂される老女だが、それが更に言い伝えの信憑性を増幅させていた。

祝福が贈られるということは幸せな未来　つまりいい男性との結婚が約束されるのも同然。昨年が一番の花冠を作った娘が、隣村の村長の息子に見初められて嫁いでいったのはつい先月のことだ。

王都では廃れつつある伝説だが、辺境の地に立つ村というのは昔の風習を殊更大事にし、また信仰深くもある。セシリアのように若い娘でさえも、神の存在を信じ毎夜祈りを捧げている。

それに、決して豊かではない村で貴族のような娯楽も無い若者たちにとって、年に一度の祭りだけが心を躍らせる要素になっていた。

花冠を女神に捧げられるのは16歳以上の娘と決まっている。

一週間ほど前に16歳の誕生日を迎えたセシリアは、初めての花冠作りにとても張り切っていた。王子さま、までとはいかなくとも素敵な男性と結婚したいとは思っていた。

物語に出てくる王子様は金色で蒼い瞳を持つとても凛々しい男性。

悪を憎み善を愛す。まさに男性の鏡だ。

幼馴染のルアンも見習えばいいと思う。

赤毛に薄い茶色の瞳をした少年は、事あるごとにセシリアをからかうのが趣味だ。水を運んでいればわざと足をひっかけてきたり、髪を引っ張られたのだった。一度や二度じゃない。元は名のある領主の出だったという理由で彼はまるで王のように振る舞う。

セシリアに言わせれば、彼は悪の魔王以外の何者でもない。本物の王というのは、もっと威厳に満ちて民に優しい。

村一番の容姿を持つ彼を取り巻く娘は多いけれど、セシリアは嫌悪しか抱いていなかった。

だからと言って先日、「オマエなんか優勝できるわけがない」と言い切ったルアンに真っ向から抗議したのは迂闊だった。

「絶対優勝してみせる」セシリアはそう言ってしまったのだ。あるうことが、ルアンと他の村娘の前で。

宣言した手前、こうして小高い丘の上に広がる草原まで足を伸ばしている。村から少し離れたここには、セシリア以外誰もいなかった。きつとここにはルアンも、村の娘の誰も知らない草花が沢山あることだろう。そう思うと心が躍った。誰も知らない草花で美しい花冠を作って、巫女様選ばれる自分が目に浮かぶ。そして、悔しそうなルアンの顔も。

先に広がるのは真っ暗な森。この森には入ってはいけないと子供のころから言われてきた。悪い悪魔が棲んでいて、森に入った人間を食べてしまうから、と。

昔は怖くて仕方がなかった父の物語も、16になった今では何とも思わない。危ないからという理由でわざと大きく言っているに違いないのだ。

真つ直ぐ伸びた舗装のされていない道は、森の入り口に近くなるほど狭まって行く。

初めてこの場所までやってきたが、森の深さと暗さにセシリアは一瞬足を止めた。

急に父親の話を思い出して、背筋を冷たいものが走る。だがすぐに自分を奮い立たせてその一步を踏み出した。

森から吹く風は冷たい。まるでセシリアを拒むかのようにびゅうびゅうと不気味な音を立てて行く手を阻む。

…或いはセシリアを呼んでいるのかもしれない。見えない大きな手でもつと奥へ、もつと奥へと誘っているのかもしれない。

言い知れない恐怖と好奇心が全身を駆け巡る。ここに来たことが村の誰かにバレれば、きつと小言を貰うだけじゃ済まされないだろう。だけどそれを凌駕するほどの魅力がここにはある。

一度だけ浅く息を吐いて、セシリアは足を進めた。

昼間だというのにこの森にはまるで光が入っていないかった。

聞いたことも無い鳥の音が頭上で木霊し、途端に不安定な足元に気を取られる。

春に忘れられたかのような冷たい空気。息を吐けばたちまち薄く視界が濁った。

引き返そうかしら。

そんな考えが頭に浮かぶ。

だが思った以上に深く森の中に入ってしまったようだ。どこを見て

も同じような木があるだけで、自分がどちらの方向から来たのかすら分からなかった。

猟師やきこりと違って森を知ることのなかったセシリアは森の恐ろしさを知らなかった。それを職業とする男でさえ、森へ向かうときは万全の準備をする。しっかりと自分の道筋を覚え、決して迷わないように。

セシリアが持っているのは花を入れる為のバスケットと、腹を満たす為の少しばかりの焼き菓子。

ここまでできて初めて、自分の軽率さを後悔し、恐怖に体が震えた。

「どうしよう…このまま帰れなかったら…」

途方もない眩きは簡単に薄暗い森の中へと消えていく。

帰れなかったら…？考えることすら恐ろしいが、セシリアの頭に掠めるのは不吉なことばかりだ。

こうなるくらいだったら、ルアンの挑発に乗ったりするんじゃないかな。禁じられている森に入らないであの草原で花を摘めば良かった。

今更どんなに後悔しても、大声で泣いたとしても村の人たちには届かない。こうしている間にも日没への時間は刻一刻と迫っている。昼まですらこんなに暗い森の中だ。日が落ちたらどんなに恐ろしいことになるだろう。

平和な村でさえも、夜は静かに家の中で過ごす。怖いのは何も人だけではないのだ。未だ夜には狼などの獣がうろついている。

このままじっとしていれば誰か私がいけないことに気付いてくれるだろうか。そうしたら誰か森まで探しに来てくれるだろうか。

セシリアが思ったことは強^{あなが}ち間違いではなかった。

しかしセシリアは知らなかったのだ。この森が、すでにケンティーフォーリア国の領地ではないことを。だから遠くに馬の嘶しななきと蹄の音が聞こえた時、セシリアの胸は期待でいっぱいだった。この薄暗い森から出られると信じて疑わなかった。

「…誰だ」

木と木の間から現れたのは馬に乗った男だった。

一人ではない。後ろに二人ほど距離を置いて控えているのが分かる。

馬上の男の顔は深くフードに覆われてよく見えない。森の暗さも手伝っている事だが。

低く問われた言葉に、セシリアは答えられなかった。村の人ではない。それだけが唯一分かったこと。

見事な艶を放った黒い馬は、今まで見たことがないくらい美しい。セシリアの父親が持っている馬とは質が違う。こんな見事な馬を持っている村人は知らない。

じゃあ、この男は一体誰なのだろうか。

「もう一度問う。お前は誰だ」

再度問われた声は、鋭い剣を思わせた。何か大きな威圧感を感じ、セシリアはそつと息を吐く。

「わ、私は…セシリアと言います。この先の村に住んでいて…その、道に迷ってしまいました」

絞り出した声は情けないほどに震えていたが、精一杯自分の状況を伝える。

道に迷ったことを告げれば、男たちが村に返してくれるかもしれない。そんな淡い期待を持って。

「この先の村？そなたはケンティーフォーリアの者か」

「え？はい」

「この森はブルサルトの領地だと知っているだろうな」

「…えっ？」

ブルサルト。

その言葉を心の中で反復したセシリアの顔は、途端に真っ青になった。

ケンティーフォーリアの隣の国であり、大陸最大の軍事国。歴史はケンティーフォーリアと比べてとても浅いが、今やその強さは敵国を作らないほどだ。

今の王の数代前までは確か公国だった筈だ。それがたった百年で帝国にまで上り詰めた国。

冷酷無慈悲と噂される王は戦を好み、小国に攻め入っては殺戮を繰り返し、自国の支配下に治めている。現に大陸の3分の2は既にブルサルトの支配下となっている。

残りの3分の1をケンティーフォーリアと、エグラントという国で分けているがその領地は微々たるものだ。いつかこの国もブルサルトに倒されるのではないかと、近年男たちの噂となっていた。

その強国の領地が村のすぐ近くにあったことなどセシリアは知らなかった。知っていたら近づいたりなどしなかったのに。

男の冷たい視線が俯くセシリアの全身を刺す。

自分の不注意の所為で、隣国の王の逆鱗に触れたらどうしよう。噂通りの王だとしたら、勝手に領地に入った人間を許しはしないだろう。

自分だけが犠牲になるのならまだいい。村を襲われ、国に戦争を仕掛けられたらきつと叶わない。そうなったとき両親は？友人は？村人たちは？国民は？

最悪の事態だけが頭に浮かぶ。

セシリアは咄嗟にその場に平伏した。ばらばらとバスケットの中に入っていた菓子が辺りに散らばる。

「申し訳ございません！ブルサルト国に対して侮辱に等しい行為、私の命でどうか…どうかお許しくださいませ」

触れた土はしつとりと湿って、セシリアの白いワンピースを汚す。母が縫ってくれた大事なものだ。死ぬときにこれを着られて幸運に思う。

死への恐怖は勿論あった。爪先から競り上がってくるようなそれを忘れようと浅く呼吸を繰り返した。

首を刎ねられれば一瞬で死ぬだろう。こんなことをして楽に死ぬとは思っていないが、男の腰に帯剣してあるおそろしく鋭利な剣はすぐにセシリアの命を散らしてくれることだろう。

そうしてどれくらい経ったのだろうか。

もしかしたら一分も経っていないのかも知れない。死を目の前に待

つセシリアにはとても長い時間に感じられたが。
しかし男は一向にセシリアの首をとる気配はなかった。それどころか剣を抜こうともせず、ただひたすら沈黙の中にいた。

「顔を上げる」

やがて男が出した言葉はそれだった。

初めは信じられなかったが、恐る恐る顔を上げる。気付けば馬から降りた男の顔が目の前にあった。

「あ…」

そこにあっただのは闇だった。セシリアが今までに見たどんな夜よりも暗い闇。

その両眼に怯えた少女が映る。まるで鏡でも見ているかのようにハッキリと。

男の指先がセシリアの額を撫でる。平伏した時に付いたのか、男が払ったところから少しばかりの土が落ちた。

「来い」

「え…あっ！」

腕を取られ、バランスを崩したセシリアを男は軽々と抱き上げた。僅かに抵抗をするセシリアの口を着ていたローブの袖で抑え、馬に乗せる。

悲鳴を上げる間もなく、男の操る馬は走りだした。セシリアと、男を乗せて。

「ジエンサー様!!!」

背後で幾人が男に声をかけたが、セシリアには届かなかった。
風が額を通り過ぎる。景色は移り変わり、木々に遮られた光がちかちかと瞼の裏で光った。

一体どこへ連れて行かれるのだろうか。

森ではなく別の場所で殺されるのだろうか。

どこでもいい。どうせ死ぬのなら、どこでだって同じだ。

男の熱に抱かれながら、セシリアはそっと意識を手放した。

春は去り、冬に帰る 2

(大変だっ…！)

風を切り、足元に絡みつく草木を振りほどき、ルアンは小高い丘を全速力で駆け降りた。

途中枝か何かが自分の頬を傷つけた気がするが、そんなことに構っていられる余裕はない。ただただ、足を動かす。

(どうして！どうして止めなかったんだ！)

走り続けながらもルアンの心の中には自分を責める言葉しか浮かんで来なかった。

きっかけは些細なものだったかもしれない。他の娘と違って自分のことに関心を持たないセシリアがいつも腹立たしかった。

あの翡翠色の瞳に自分が映らないことにひどく苛立ちを覚え、わざと突っかかっては彼女を怒らせてばかり。

「オマエなんか優勝できるわけないだろ」あの一言も、咄嗟に口から出た。その後の傷つく顔が見たくて。

その結果が、これだ。

禁じられた森。

村の人々はあの森をそう呼んでいた。子供の頃は魔物が出るといっ話を聞かされていたが、つまりは近づくなと、そういうことだ。

一度だけ興味本位で近づいたことはあったが、森の放つ異様な雰囲気には足が竦んで一歩たりとも中には入れなかった。

あの森を抜けた先に何かあるのかは、誰も知らない。知る必要もない。ハッキリ言ってあの森の存在はあつてないようなものだ。

ルアンが村を出たセシリアの後をつけた時もまさか森に入るものだとは思っていなかった。てっきりその辺の草花で花冠を作るものだと考えていたから。

セシリアの後に続いて森に入った時、万が一のことも考えてルアンは目印になる赤い紐を所々の枝に括りつけておいた。暗い森の中で迷子になったセシリアが泣けば、助けに出てやろうとも思っていた。数人の男たちが馬に乗って現れた時も、それほど大変なことではないと楽観視していたくらいだ。

だが、それはあまりに一瞬の出来事だった。上等な馬に乗った男がセシリアに近づいたかと思うと、あっという間に馬に乗せて走り去ってしまったのだ。

一瞬と言うには時間は経っていたかもしれない。しかし、ルアンが全てのことを理解する頃には男の姿もセシリアもその場にはなかった。

置き去りにされたバスケットと散らばった焼き菓子だけが目の前で起こったことが現実だと物語る。

全ては自分の不用意な発言と、身勝手な感情の所為だ。

村に入ると丁度、セシリアの父　アドニスが栗毛の馬に乗って家に帰ろうとしているところだった。咄嗟に馬の前に身を晒し、両手を広げる。

馬の嘶きと、アドニスの驚いた声が頭上に聞こえたのはほぼ同時だった。

「ネーフルのところのルアン君じゃないか！いきなり馬の前に出てきては…」

「セシリアが攫われたんだ！」

アドニスの声を遮ってそう伝えるが、言葉の意味を理解しかねたアドニスは眉間に皺を寄せただけだった。

無理もない。長年危険とは無縁の村に生きてきて、人々の噂になるのは専らどこそこの夫婦が喧嘩したのだといったものばかり。ルアンですら森の中の光景を見ていなければ、誰かが攫われたなんて馬

鹿らしい作り話だと思うだろう。

しかし、これは現実だ。なるべく端的に、要点を話さなくてはいけない。

「禁じられた森に行ったんだ。それで道に迷って…：そしたら全身黒づくめの男に突然連れ去られて…：俺が余計なこと言ったから！」

口から出たのはあまりにお粗末な言葉の羅列だった。混乱して上手く言葉がまとまらない。しかしルアンの必死の形相と、言葉を繋ぎ合せて漸くアドニスにも事の重大さが呑みこめたらしい。

徐々に顔を険しくしていったアドニスは手綱を引くと、まだ何か口にしようとするルアンの言葉を最後まで聞くことなく妻の待つ家へと馬を走らせた。

手綱を持つ指先が震える。ルアンの言った言葉はにわかには信じられなかったがわざわざこんな悪趣味な嘘をつくとも思えない。

恐れていたことが起きてしまった、とアドニスは思った。16年無事に過ごしてきたというのに…！

「エリザ！」

乱暴に家のドアを開けると、台所にいたエリザが何事かと隣の部屋から顔を覗かせる。

裕福でもない、農民の家。狭くて必要最低限の家具しか揃っていないが、幸せに溢れていた家だった。

同じ部屋で起きて、同じ部屋で食事を取り、そして眠る。この16年間、当たり前だった日常が今崩壊しようとしていた。

「お帰りなさい、あなた。今丁度昼食の準備をしていたところなの

よ

何も知らない妻は、いつものように柔らかい笑顔を浮かべいつものように夫を出迎えようとする。次に紡がれる言葉を聞くまでは。

「セシリアがつ…!!」

エリザの顔が蒼白になり、その手から皿が滑り落ちた時。
一つの幸せが終わり、一つの絶望が始まった。

*

優雅な装飾が施されたその部屋は、しかし決して華美ではなく、壁や家具はすべて落ち着いた色で統一されていた。
壁には歴代の王たちの肖像画が並び、この部屋に入る者全てを威嚇するかのように重厚な雰囲気を出している。普通の人間が入ったら息をするのすら躊躇われそうな空間で、全身を黒に包まれた男と濃紺の服に身を包んだ男が向かい合っていた。

「ジェンサー様。一体どういことなのか説明して頂けますでしょうか」

言葉こそ丁寧なもの有無を言わせない口調でそう問えば、ジェンサーは彼を一瞥し、漸くその重い口を開く。

「お前が見た通りだ。説明するまでも無い」

「しかしあのような…」

「アルフォンス」

ジェンサーの一言に、アルフォンスと呼ばれた男は口を閉ざし軽く頭を下げる。主の口調はそれ以上は触れるなと暗に言っている。

やがて重く息が吐き出されると、ジェンサーは今まで座っていた椅子から立ち上がり窓の傍まで歩み始めた。

頑丈な窓枠は少しぐらいの銃弾では壊れない作りになっている。窓だけではない。この城の全てが戦に備えられるように国の最高技術を駆使して作られている。

小高い丘の上に立つ城は石造りの砦に守られ、軍事国らしい荘重さが更にこの城を華美から遠ざけていた。

窓ガラスはしつとりと霧に濡れ、細い水滴の筋が幾つも流れては落ちる。

ブルサルトは冬が長く、極端に春が短い。幾日も太陽を見ることのないのは当たり前であり、やっと晴れ間が覗いたかと思えば数時間後にはまた雨が降り出すということも珍しくはなかった。

この気候を好ましいと思ったことはないが、少なくとも他の国に攻め入られる時には有利な部分になる。そして厳しい気候の中で育成された兵士たちにとって、他国の穏やかな気候の中での戦は実践と言うより訓練に近いと言っても過言ではなかった。

そうして築き上げてきた大陸最強の地位。今のジェンサーが持つ物は計り知れない。

「…あれはまだ目覚めぬか」

「は、医師に見せたところ何の異常もないということでございます」「そうか」

深く頭を垂れながらアルフォンスはジェンサーに問いたくてならなかった。あの娘を一体どうするのかと。

隣国から買い取った何の価値も無いあの森といい、迷い込んだ村娘を攫うように連れ去ってきたことといい、全てが謎だ。

ブルサルト領地だとは知らなかったとはいえ、勝手に森の中に入ってきたあの娘をただで返そうとはアルフォンスも思つてはいない。

冷酷無慈悲と噂される王だが、決して無差別に人間を殺している訳ではなく、時にはこちらが驚くような寛容さを見せる場合もある。

まだ少女の面影を残し

た娘には何かしら軽く罰を与え、村に返すだろうと思つていた。

だが王　ジェンサーは娘を連れ去ってきたばかりではなく、気を失った彼女に部屋を与え手厚く看護をするよう医師に申し付けた。

いや…そこまでであつたのならアルフォンスも首を傾げながらも納得しただろう。

王はあろうことか娘に隣の部屋を与えたのだ。王以外、一部の許された人間しかその扉を潜れない　王妃の部屋を。

大陸に名を馳せる王たちの中で、ジェンサーは最年少でその玉座に座っている。未だ正式な王妃は迎えておらず、ブルサルトの財力と軍事力に目を付けた他国から幾度となく美姫との婚姻を匂わされている。

しかし王は一度もその申し出に答えたことはなく、当分結婚するつもりもないと大臣たちに宣言していた。

せめて夜枷の相手にと送られた自国の貴族の娘たちにも興味を示さず、大抵は一年を待たずにして降嫁していった。

それが、だ。ジェンサーは迷わず娘を王妃の部屋へ連れていった。

侍女やアルフォンスが止めるのも聞かず、腕に抱えたままの娘を王自ら寝台

に運ぶという異例の事態も起きた。
その場にいたのが口の堅い侍女とアルフォンスだけだったから良かったものの、下手すればとんでもない噂が立ちかねない。
長年宰相としてジェンサーに仕えてきたアルフォンスにとって、こんなことは初めてだった。圧倒的な存在感と、誰もが平伏したくなるような崇高さ、ただ一人その頂に王冠いたadakiを授かるに相応しい人物。
その尊い名に傷が付くことは何としても避けたかった。

「僭越ではございますが…あの娘をどうなさるおつもりでしょうか？」

やっと窓から離された瞳が射抜くようにアルフォンスに向けられる。何度こうして向かい合っても、その瞳の強さにはどうしても慣れそうにはない。

この国の人間は色素が濃い髪と瞳の色を持つが、その中でもジェンサーの色は異質だった。

黒よりも深い黒。その色に名前はつけられそうにはないが、そういう表現がぴつたりと当て嵌まる。

知らず知らずのうちに緊張で汗が滲んだ手を握りしめていた。ごくぐり、と喉の奥が鳴る。

「そうだな。お前にだけは言っておいてもいいだろう」

「…と、申しますと」

「あれは私の妻になる娘だ。そのつもりで準備をしておけ」

アルフォンスは一瞬自分が夢でも見ているのかと錯覚した。いや、そうでなければなんだと言うのだ。

つい先日暫く結婚するつもりはないと宣言したばかりの王が、名も知らぬ、それも隣国の村娘を妻に？

夢か、それとも王に化けた魔物の仕業か。

魔物など、今時子供ですら信じない言葉ではあるが、少なくともこの瞬間アルフォンスはその存在を世界中の誰よりも確信した。

王本人はアルフォンスの引き攣った表情を知ってか知らずか、執務机の上に置いてあつた書類を取ると「他に必要なものはあるか？」と聞いてくる始末。

その手渡された書類を目にして更にアルフォンスは気が遠くなったような気がした。

ドレス、ヴェール、ブーケ、指輪。ずらりと並べられた文字が何を意味するか分からないほど馬鹿ではない。馬鹿ではないが…この瞬間、いつそそうなってしまうたいと切望した。そうなれたら、どんなにいいか。

「ジェンサー、様。一体、どういう、おつもりで」

辛うじて紡ぎ出した言葉が感情のままに吐露されなかつただけでも褒めて貰いたい。

「私がそう望んだ」

「望んだ！？今日初めて会つた娘を妻にとですか！しかも隣国の村娘を！」

「悪いか」

王の前で語気を荒げるなど、普通なら首が飛んでもおかしくない。しかし、今のアルフォンスに冷静な判断は出来かねた。

対するジェンサーの口調はいつも通り、抑揚はないものの気分を害している様子はない。

逆にごく当たり前のことを口にするように言葉を返されれば、アルフォンスにその先を続けることは出来なかつた。

一体何がどうなってしまったのだ。もはやジェンサーの中で全ては決定事項となっていているらしい。

自分を落ちつけようと息を吐き、整えられた髪を掻き乱す。そうしなければ冷静になれそうにもない。

「王、どうか賢明なご判断を。いくら私でも納得しかねます」

「お前の言う賢明な判断とはなんだ？血筋や権力で妻を選ぶことか」「いえ、決してそのようなことでは…」

「残念だがこれを見たら幾らお前でも何も言えまい。例え口煩い大臣でもな」

ジェンサーがアルフォンスに渡したのは嚴重に鍵がかけられた木箱だった。

国家の機密事項や外交の際に使う、極めて重要な書類を入れる為に使うもの。同時に手渡された鍵を回し、そこから更に固く羊皮紙に包まれている紙を取り出した。

アルフォンスの灰色の瞳が文字を追っていくことに見開かれていく。そこに書かれていたのは驚くべきような内容。そして先ほどジェンサーが言ったように、アルフォンスの口を閉ざすには充分な理由になった。

「これは…」

王は全て知っていたのだろうか…その上で彼女を連れ去ってきた？

「娘が目覚めたらすぐに私に報告しろ。全てはそれからだ」

闇色の瞳が探すのは春の光。求めるのは春の温もり。

低く響いた声には、切望さえ孕んでいた。

囚われの春 1

目が覚めて、セシリアの目に飛び込んできたのは見慣れた木の天井ではなかった。

今まで見たことのないほど大きな四柱式のベッド。日の光さえ反射しそうな程白い地に、細かい花の模様が螺旋を描くように天蓋から垂れ下がっているカーテンに描かれている。

ベッドを飾る繊細な刺繍の一つ一つは、どれをとっても一流の職人の手によるものだ。

自分がどこにいるのかを確認するために身を起こせば、柔らかいシートにあっさりと沈む。肌を撫でる感覚は驚くほど滑らかだった。

「目覚めたか」

低い男の声が聞こえて初めて、セシリアは現実に戻された。

ゆっくりと視線をそちらに向ければ、途切れた記憶の一番最後に見た色が目に飛び込んできた。

セシリアがいる真っ白なシーツの海とは正反対の暗い闇。男が着ているのは覚えている質素なローブではなく、黒地の豪華な服だった。

「あなたは…」

誰、と問う前に金の刺繍が施されている袖口から男の手がセシリアの頬に伸ばされる。しかしそれは反射的に目を瞑っていたセシリアに触れることなく、小さな溜め息と共に降ろされた。

「気分はどうだ。腹は空いているか」

「え…？」

「半日近く気を失っていたんだ。何か口に入れやすい物を頼んでこよう」

男はそう言うと、セシリアに背を向け男の背丈の倍はあろうかという重厚な扉から出ていこうとした。

「待って…！待って、下さい」

セシリアはベッドから身を起して叫んでいた。分からないことだらけだ。うる覚えな記憶を必死に辿り、少ない情報を必死に集めてもこの状況を説明することはできない。

禁じられている森に入り、そこが隣国の領土だと言うことを知った。自分の命を以て罪を償おうとしたが、男は殺すどころか馬に乗せここに連れてきたらしい。

見渡す限り、並ぶ調度品の数々が庶民が持てるような物ではないと分かる。高い天井は簡単にセシリアの叫びを吸収し、僅かな響きでその存在を示すだけ。

一体ここはどこなんだろう。そして、どうして私はここにいるんだろう。

取り留めもないような疑問が次々と頭に過っては消えていった。

男は微動だにせず、扉と向き合っていた。セシリアの方を見るつもりはないらしい。

「ここは、どこですか？あなたは誰？どうして私はここにいるの？

…私を、殺さないの？」

はっと、息を呑む。振り返った男の瞳に囚われそんな感覚に陥った。

男が大腿でベッドまで近づきその口を開くまでセシリアは息をすることさえ忘れ、闇色の瞳から一寸たりとも目を逸らせなかった。すぐ傍まで男の顔が迫る。喉に入った空気の冷たさが、自分が息をしている証拠だ。

「ここはブルサルト城だ」

「ブルサルト、城？」

男の口調は淡々としていて抑揚がなかった。瞳は何の感情も宿さず、怯えるセシリアを映す。彫刻のように整った顔立ちは、瞳まで造り物のようだった。

未だそこから視線を動かさずにいたセシリアに、男は顔を寄せ耳元で囁いた。

甘く、残酷な言葉を。

「我が名はジェンサー・ルーダス・ブルサルト。この国の王であり、そなたの未来の伴侶だ」

「……っ！」

「セシリア、そなたは私の妻となる。殺すわけがない」

やがて男　ジェンサーの顔がゆっくりとセシリアから離れていても、セシリアは自分の思考を戻すことが出来なかった。

ジェンサーの口にした言葉全てが少しの現実も帯びないまま耳に響く。何か言おうにも、喉が渴いて言葉にはならない。

空中で二つの視線が交わった時、どこか虚ろ気だったジェンサーの瞳に初めて感情が宿る。それは熱情とも、焦れともとれる色だった。

ジェンサーが片手をついた所為で豪華なベッドがギシ、と軋む。その音に反応してセシリアの肩が跳ねれば、僅かにジェンサーの眉が顰められた。

恐ろしいという感情すら湧かないのは未だ心が現状についていかに為だろうか。指先の感覚すら今は臍げだ。

セシリアに向かって伸ばされた手は、今度は躊躇わなかった。まるでガラス細工に触れるかのようにそっと、ジェンサーは亜麻色の髪を撫でた。

二、三度往復していた指はやがて触れた時と同じように静かに離れていき、それと同時にセシリアを縛っていた黒い瞳からも解放された。

「私は仕事に戻る。専用の侍女をつけたから不便があれば言うといい」

早口にそれだけを告げるとジェンサーは身を翻し、あの重厚なドアの外へと消えていった。今までの会話など嘘のように、呆気なく。セシリアは閉じたドアを呆然と見つめていた。

ほんの半日程度の間に関自分自身に起こったことが、あまりに現実離れして未だに状況を飲みこめない。

やがてじわじわと身体中を蝕んでいく感情は一体何なのだろうか。

恐怖とも驚きとも似て、似つかない気持ち。

王と自ら名乗った男は、セシリアを妻にすると言った。領土を冒した自分を処罰するでもなく。

ただの村娘であるセシリアを妻にすることに利益など何もない。それとも知らないだけで、自分にはそうするに値する価値があるのだろうか。

頭の中を巡る疑問は尽きることがない。全てが疑問だった。

「どっしり……」

ぼつり、と零した声は天井へ吸い込まれていく。

村では春の訪れを祝う祭りが始まるうとしているのに、隣国ではまだ春は知らない。薄いワンピース一枚のセシリアの体温は冷たい隙間風に容赦なく奪われていった。

何か上に羽織る物を、と辺りに目をやるとベッドの傍に置いてある椅子に温かそうなガウンが掛かっていた。

そっとシーツから足を出せば、刺すような冷気に体が震える。急いでガウンを羽織りしっかりと前を合わせると寒さも少し和らいだような気がした。

外を見ると重苦しい雲が空一面を覆っていた。

ケンテイーフォーリアでは凍てつく冬でさえ嫌だと思ったことは一度も無かったのに、その灰色に思うのは寂しさ。

そして窓の外に広がる景色もまた、セシリアの心を暗くしていた。

一面に広がる花畑は存在せず、刈り取られた木が規則正しく並んでいるだけ。その草木すらまるで敵を威嚇するかのように城を囲んでいた。

目に映る物全てがセシリアにとって異質の物だった。つい先ほどまで横たわっていたベッドこそ、豪華な装飾が施されてはいたがその他の調度品に華やかさはまるでなかった。

ケンテイーフォーリアが「太陽」と比喻されるのに対して、ブルサルトが「闇」と称される訳はここにもあった。

高い天井に、大きな窓、広い室内にはセシリアが住んでいた狭い家がまるまる3つは入ってしまうだろう。ただどこには温かさではなく闇が漂っている。

城というより要塞に近いそれは、最強の軍事国の象徴とも言える。

固い椅子に、芸術とは程遠い規則正しい模様が描かれた装飾。王の、優しさの欠片も無いような深い瞳。

知らず知らずのうちに唇を噛み締めていた。

ジェンサーの言葉からセシリアを殺すつもりはないと分かったが、いつその気が変わるとも知れない。何しろ相手は、戦争好きの王だ。いつその扉から剣を持って現れるのかと思うと気が気ではなかった。

(逃げたい…)

本能的にそう思ったが、すぐにその考えを打ち消す。逃げようと思っただけで逃げられる訳がない。

扉の向こうにはきつと監視の役目を担う兵士がいるだろうし、軍事を誇っている国の兵士相手に剣の覚えもないセシリアが叶う筈がない。窓からシーツを垂らして、とも思ったが高さと頑丈な枠を見たところそれも無理そうだ。

それに万が一、この城から逃げられたとしてもどうやって村に帰るのかも分からない。気を失っている間に馬で連れてこられたセシリアには、村の方向も、距離も全く分からなかった。

結局セシリアに出来るのは大人しくしている事だけだ。

シン、と静まり返った部屋の中は酷く孤独だった。おもわず零れそうになる涙を必死に堪える。

「セシリア様、入ってもよろしいでしょうか？」

ジェンサーが出ていったのとは別の扉の奥から、微かに聞こえる声。先ほどまでセシリアの心に渦巻いていた寂しさは、その声によって拡散されていった。

「はいっ…ど、どござー！」

そう答えると、扉から一人の女が入ってきた。深々と一礼し、侍女らしい服装に身を包んだ彼女は柔らかく笑うとセシリアの許へと歩みを進めた。

「本日からセシリア様の身の回りをお世話いたします、イルゼと申します」

“セシリア様”という言葉に、なんだか背筋がむず痒くなる。単なる村娘であるセシリアはそんな呼ばれ方には慣れていない為だった。それに一見したところ、イルゼの方が遙かに身分があるように思える。

きちんとした身なり、礼の仕方には優雅さが漂っている。王宮に仕えることができるのは貴族のみだと聞いていたセシリアは、慌てて両手を振った。

「あの、イルゼさん！」

「まあ。わたくしは臣下です。どうぞイルゼとお呼びくださいませ」

「いいえ！あのっ…私、そんな身分じゃないんです！」

「何を仰いますか！セシリア様は未来の王妃殿下。陛下にもそう聞いております」

イルゼの言葉にセシリアは絶句した。

“王妃殿下”それはあまりにも現実離れた響きだ。王の妻になるということすら、未だ整理しきれていないのに一村娘の私が王妃？妾という立場すら有り得ないことだと思っていたセシリアにとって、その言葉は軽く心臓を止めるくらいの威力は充分に持っていた。

一方、イルゼは翡翠色の瞳を見開いて自分を見つめるセシリアを、負けず劣らず見返していた。

突然王に呼ばれたかと思うと、未来の王妃殿下の侍女に任命された。

今まで結婚どころか女すら寄せ付けなかったあの王に、だ。常に冷静を保ちなさいと侍女頭である女官長に言われているが、あの時ばかりは不敬にも数秒固まってしまった。

下級貴族であるイルゼは、元々ブルサルトより少し離れた小国出身だ。ブルサルトと戦になる前までは、暴君の元で荒れた政治が行われ国自体が崩壊する寸前だった。

ジェンサー率いるブルサルト軍が王の首を取り、支配下に置いた時は国民はまた同じことが繰り返されるのではないかと恐れたが、ジェンサーは傾いた国を建て直したばかりか、敗戦国の国民を奴隷にするわけでもなく農民にすら人権を与えた。

今イルゼの国は元のような豊かさを取り戻しつつある。それもこれもジェンサーのお陰だった。

だから両親が持ってきた結婚話を振り切り、ジェンサーの為に尽くそうと思った。この城で働いている者の殆どがイルゼと同じく、ジェンサーを慕い他国から出てきた者ばかりだ。

噂では冷酷無慈悲などと言われているが、まるっきりの嘘だと支配下に置かれた国々の国民は知っている。

ジェンサーは決して、豊かで賢王がいる国は攻めない。無能で今にも壊れそうな国を攻め、戦という名のその実救済をしているのだ。

そんな尊敬する王が王妃に望んだ娘。

セシリアが気を失っていた間、王が仕立て屋を脅す勢いで持つてこさせたドレスがクローゼットの中には山のようにある。

必死に自分は傅かれる立場にないと言うセシリアの瞳は美しく輝き、女というより少女の香りを色濃く残した彼女はその存在だけで春を思い出させた。

ジェンサーがどんな心境でセシリアを妻に求めたのかイルゼは知らない。しかし、なんとなくだがジェンサーの隣にはセシリアが合うような気がしてならなかった。

「セシリア様。その恰好では寒うございましょう。王から沢山のドレスが贈られましたので一つずつお試しになりませんか？」

柔らかく、しかしそれ以上セシリアの言葉は聞き入れないと言った笑顔でイルゼはそう言う。

セシリアにもそれは伝わったのか、一瞬だけ眉尻を下げた後は大人しく首を縦に振った。

*

書きかけの書類をぼんやりと見つめながら、ジェンサーの口からは知らず知らずのうちに溜め息が零れていた。

常人には聞きとれないほど微かなものではあったが、いつもに増して神経過敏になっているアルフォンスには大きすぎるくらいに響いた。

決して軽い内容の仕事ではないのにも拘わらず、執務机に向かうジェンサーの様子は明らかに集中力を欠いていた。いつもならばこちらが口を挿めぬくらしいの決断力で、次々と仕事を捌いていくのに。

（やはりあの娘のことが気にかかっているのだろうか）

これがどこかの国の王侯貴族の姫や自国の令嬢ならば手放して喜べただろう。しかし、アルフォンスの心境は複雑だった。

世継ぎを残す為にもジェンサーに結婚をして欲しかったことは確かだったのに。

「陛下、そちらの書類はどうになりました？」

「……」

ジェンサーの意識を逸らそうと、言葉を掛けても無駄に終わった。視線は書類から離れていないのに意識が違つところに飛んでいる。右手に持つ羽ペンと同じところを何度も叩いた所為で、紙にインクの黒い染みを作ってしまった。

伸ばした指先に絡めた髪は驚くほど柔らかかった。ジェンサーを見る翡翠色の瞳に危うく引き寄せられ、口付けを落としてしまうところだった。

ジェンサーの手の中で真っ白な紙を汚す黒いインク。それがまるでセシリアをさらった自分のように思えてならない。

あの村で一生を過ごすことができたのなら、セシリアは幸せだったのかもしれない。しかし一度手にしてしまった体温をジェンサーは手放すことは出来なかった。

汚い手を使ったと思う。しかしそれでも、どうしても欲しかった。

(嫌われてしまったかも知れないがな…)

呆然と怯えるような瞳に心が痛む。それを承知で無理矢理攫ってきたというのに、傷つくのは自分勝手すぎる。

「アルフォンス。東の国境の兵士をもう少し増やせ。妙な連中がうるついていると報告が来ている」

「は。すぐに手配いたします」

セシリア。

いつかお前の心に、私と同じ気持ちが増える日は来るのだろうか。
その顔に、怯えではなく笑みが零れる日が来るのだろうか。

囚われの春 2

誰かの手を借りてドレスを着るのは、ひどく居心地が悪かった。

貴族の令嬢ならまだしも、セシリアは生まれも育ちも小さな村だ。

そもそも侍女という概念がない。

それでもこんな凝ったデザインのドレスを一人で着ると言われても無理だ。

ウエストをきつく締めあげられる道具に、踵の高い靴。

今まで見たことも触れたことも無いものばかりが今、セシリアを飾っていた。

「まあ！よくお似合いですわ」

鏡越しにイルゼは嬉しそうに微笑んが、セシリアは笑顔とは呼べない表情でしか返すことが出来なかった。

長い髪は高い位置で纏められ、わざと作った後れ毛は優雅にカールされている。

クローゼットの中にあつた溢れんばかりのドレスを試着したり、合わせたりしながら最終的にイルゼが決めたのは質素な白いドレスだ。それでも肌触りは滑らかで、胸元を縁取るレース一つをとつてもどれだけの価値があるのかとてもじゃないが予想はつかない。

きつと年頃の娘なら誰でも喜ぶであろうドレスも宝石も、セシリアには美しすぎた。

今自分を見つめているのは、自分であつて自分ではない。

そこにいたのは不釣り合いなドレスに身を包んで、怯えたような目をしている惨めな少女だ。

「あの…まだ、終わりませんか？」

「お疲れになりましたか？申し訳ありませんがもう少して終わります」

「はい…」

繊細な装飾が施された箱から、イルゼが真珠を贅沢に使った髪飾りを取り出したときだった。

扉を叩く音と、少しくぐもった男の声が聞こえたのは。

一瞬、ジェンサーかと身を固くしたセシリアだったが、先ほどジェンサーが出ていったのとは別の扉だと分かるとほっと安堵の息を漏らした。

イルゼが軽く視線で許可を求めてきたのでセシリアは「どうぞ」と返した。

入ってきたのはジェンサーよりも幾分年がいった、それでも中年とまではいかない男だった。

「ご支度中のところお邪魔した無礼をお許しくださいます。私はこの国の宰相をしております、アルフォンスと申します」

服装は一寸の隙もなく整えられており、神経質そうな瞳は着飾ったセシリアの全身をまるで品定めするように行き来する。

その視線を受けたセシリアは、王と名乗った男の時よりも居心地の悪さを感じた。

確信とまではいかないが、その視線でセシリアを歓迎していないのだけは分かった。

「何かご不便なことはありませんか？ 宝石やドレスは足りておりますか？」

「いえ…あの、その…充分です」

「欲しい物がございましたらすぐに揃えましょう。王より貴女様には不便をさせるなど直々に申しつかっておりますので」

王、という言葉にあの黒い瞳が脳裏を掠めた。
冷たい色だと思った。何もかも吸い込んで、消してしまいそうな色だ。

あの瞳に見つめられるだけで、体が動かなくなる。まるで見えない鎖に雁字搦めにされているように。

思い出しただけで急に恐怖が込み上げてくるのを、自分自身を抱きしめることで何とか忘れようとした。

「…王が、貴女と晚餐を共にしたいと仰せです」

アルフォンスの言葉にセシリアは弾かれたように顔を上げた。

困惑しているのはセシリアだけではないようだ。伝えた張本人であるアルフォンスも綺麗に整った眉を顰めていた。

「どうして…私、そんな」

「断るのですか？」

出来ない、という言葉はアルフォンスの鋭い声に遮られた。

それは暗に断ることは不可能だと言っていた。

どの国に於いてもそれが余程のことでない限り王の言葉は絶対なのだ。

ましてや今セシリアは囚われの身。断ったらどんな結末が待っているか分からない。

明日にでも王に逆らった罪で首を取られ、ケンティーフオーリアに戦争を仕掛けられるという可能性も無いわけではない。

そなたは私の妻となる

一刻前に囁かれた言葉。

ただ単に気紛れに与えられた言葉なのか、それとも何か意図があっ

てのことなのか。それを確かめる術はない。

俯いて祈るように手を組むセシリアを苦々しげに見つめていたアルフォンスは、息を吐くことで己の感情を制御しようとした。

この娘の何が王をあれほどまでに惹きつけたのか分からない。

初めて見た時のような粗末な服装は身に纏っていない。自国の最高級の布を使ったドレスを着、髪を結い上げているその姿はそれなりに見え

るだろう。

よく見れば亜麻色の髪は指を通したくなるほど柔らかさそうであるし、長い睫毛に縁取られた翡翠色の瞳は宝石のようだと思う。

しかし目の前で怯えたように体を震わせるセシリアには、女というより少女という言葉の方が当て嵌まる。

今までジェンサーに捧げられた娘の中にはセシリアと同じ年の姫も何人かいたが、彼女たちの方が器量も体つきもずっと素晴らしかった。

家柄も申し分ないのにも拘わらずジェンサーは誰一人として夜枷を命じるところか、見向きもせず臣下に与えた。

アルフォンスはジェンサーの自室で見せられた書類のことを思い出した。

あれを知っている人間が何人いるか分からないが、重要な機密事項であることには変わりない。

あの時は書類の内容に驚いて一旦は口を噤んだものの、セシリアを妻にするというジェンサーの考えにはどうしても賛同しかねる。

例えばセシリアを側室にするというのならばこつも頭を痛めたりはしなかった。他の大臣たちも王の一時の気紛れとして、苦笑いしながらも反

対はしないだろう。

しかし、あるうことかジェンサーはセシリアを王妃の椅子に座らせる気だ。予想ではない、あの瞳を見れば確信だとさえ言えた。それは決して喜ばしいことではない。

確かにブルサルトは今や敵を知らないほどの国ではある。平和の為にどこかの国の姫を娶る必要も今のところない。

だがそれでも王族の婚姻には様々な思惑が絡むものだ。他国ではないなら自国から、と大勢の貴族が挙って自慢の美姫をあの手この手を使って城に上がらせようとしている。

それを蹴ってきたのはこんなみすばらしい娘を王妃にする為ではなかったのに。

第一小国である隣国の、しかも村娘に大陸一の王妃が勤まるとも思えない。最初は物珍しさに多少の失敗は見逃して貰えるだろうが、現実

はそんな簡単なものではないのだ。

人々は頼りない王妃に不安を覚えるだろう。その不安はやがて悪意を生み、ブルサルトの権威を落としかねない。

もしもと仮定するには大袈裟な気もするが、少しでも不安要素になるような芽は早めに摘み取っておきたい。

アルフォンスは知らず知らずのうちに冷やかな目でセシリアを見ていた。

「どう返事を返しましょうか？」

呆れたような、そしてどこか咎めるような色で問われセシリアの肩が微かに跳ねる。

「行き、ます」

「分かりました。そう王に伝えましょう。お時間がきましたら使いのものを寄こします」

それでは、とまるで手本のような辞儀をするとアルフォンスはそのまま出ていった。

ボタン、と扉が閉まる音とイルゼの悲鳴にも近い声が重なる。

「素晴らしいですわ！王直々に晚餐への招待だなんて！セシリア様、うんと綺麗にしましょうね」

イルゼの楽しそうな声とは裏腹に、セシリアの表情はどんどん曇っていった。

綺麗なドレスが欲しかったわけじゃない。高価な宝石が欲しかったわけじゃない。

殺さないのなら家に帰して。そう叫びたくて仕方なかった。

つんと鼻の奥が痛み、涙が零れそうになるのをセシリアは下唇を噛んで必死に堪えた。

*

セシリアは自分の手が震えていることに気付いた。

ナイフとフォークはいつ食器に当たってもおかしくないほどに小刻みの振動を繰り返す。

音を立てたが最後。後ろに控えている給仕たちの眉は忽ち顰められることだろう。未だ嘗てこれ程までに胃が重くなるような食事を取ったことはあつただろうか。次々と運ばれてくる豪勢な食事の味さえ、緊張の所為でよく分か

らない。

目の前に座るジェンサーはやはり王としての威厳を備えていた。

少しでも気を抜いてしまえば逃げ出したくなるような圧倒的な気。

ただ食事をする姿は王族らしく優美だった。

いつも家族と取っているような笑いに溢れた食事ではない。そこにあるのは重い沈黙と、一体何人が座るのだというくらいに長いテールブル。

そんな中で気を楽にしるという方が無理な話なのだ。

「不便はないか」

沈黙を破ったのはジェンサーだった。

先ほどまでセシリアの方を見ようともしなかった瞳が、今真っ直ぐにセシリアを射抜いている。

喉の奥がカラカラに渴くような感覚を覚えながらもセシリアはなんとか言葉を紡ぎ出した。

「はい」

「そうか」

会話はすぐに終わりを告げた。

ジェンサーはそれ以上何も聞いてはこなかったし、再びその目にセシリアを映すことも無かった。

対するセシリアも何も言うつもりはなかった。口を開けば大声でジェンサーを詰つてしまいそうな気さえしていたから。今すぐ返して欲しいと泣き叫んでしまいそうな気さえしたから。

食べ物が喉を通る度、少しずつその言葉も呑みこんでいった。

水で喉を潤し、なんとか心を落ち着けようと努力した。目の前の食事に集中すれば余計なことは考えなくて済む。

それだけを頼りにナイフとフォークを持つ手に力を込めた。

食堂には驚くほど高い天井がアーチを描いていた。

給仕が食事を運ぶ音、食器をテーブルに置く音。響くのは一瞬の事ですぐにそれは天井に吸い込まれていった。

厳粛な石造りの壁には蝋燭が連なっていて、ぼんやりとした炎で辺りを照らしている。絵画や彫刻などといった芸術品は一切なく、代わりに天井まで届こうかという大きな窓が、欠けた月を切り取っていた。

セシリアにはそれが、何よりも美しく思えた。人工的に作られたものも、確かに綺麗だとは思う。だけど自然の美しさには到底叶うものではない。

（お父さんもお母さんも、同じ月を見ているのかな）

ふと、そんな考えが頭を過り、それと同時に目の奥が熱くなる。拙いと思つた時には既に涙が頬を伝っていた後だった。

慌てて指先で涙を拭う。一瞬の動作だったから誰にも気づかれなかった筈だ。

現に給仕たちの手は休むことなく、セシリアの前に新たな食事を置いていく。

しかし、ジェンサーは セシリアを見つめていたジェンサーだけは、その一瞬さえも見逃さなかった。

僅かに光る涙の粒が、痛いほどにジェンサーの心臓を掴む。だが、どんな言葉を掛けたところでセシリアの慰めにはならないことは分かっていた。

すべては自分が強引に連れ去った所為。

それがどんなにセシリアを混乱させ、悲しませるのか理解したつもりでいたのは全くの勘違いだ。一筋だけ流れた涙で嫌というほど思い知らされる。

自分勝手なものも分かっていたが、今更何も知らなかったことになど出来る筈もない。

「セシリア」

「は、はい」

「明日、少し庭に出てみないか？」

突然紡ぎだされた提案に、セシリアは目を瞬かせた。

「我が国はまだ冬だが、庭に温室がある。ケンティーフォーリアにはない植物もあるだろう。花は好きか」

自分を見るジェンサーの瞳には相変わらず緊張してしまっが、さっきまではなかった柔らかさも感じられる。

黒は…冷たいだけの色ではなかったらしい。

「はい。大好きです」

「ならば決まりだ」

セシリアの答えに満足したのか、ジェンサーは立ち上がり給仕たちに部屋に戻る旨を伝えた。

王らしい漆黒のマントがジェンサーの動きに合わせて踊っているの

を、セシリアはただ呆然と見るしかなかった。

靴音が高く響き、天井に木霊する。

おもむろに足を止めたジェンサーは、もう一度確かめるようにセシリアの方を振り返った。

「髪は降ろしていた方が似合うな」

驚きのあまりセシリアが声を失っている間に、ジェンサーは扉から出ていってしまった。

誰にも気づかれないような、僅かな笑みを浮かべながら。

雪解け - 1

柔らかい朝の光が、閉じた瞼の向こうを闇から引きずりだす。いつもと同じように寝返りを打ち、僅かな目覚めの余韻を楽しんだ。あと10も数える頃には母親の軽やかな声と、朝食のいい香りが狭い家の中を満たしていくことだろう。飼っている馬や鶏に餌を与え終えた父親の長靴の音、すぐ近くの森から聞こえる小鳥たちの囀り^{くさび}。目を開けたら、いつもと変わらない朝が始まる筈だった。

「セシリア様」

けれどセシリアが期待した声も音も香りも、何一つ叶わなかった。

「おはようございます、セシリア様」

厚手のカーテンを開けながら、イルゼはセシリアの周りを行ったり来たりと忙しそうに動き回る。今までカーテンに遮られていた陽光が一気に室内に溢れ、その眩しさにおもわず手を翳す。

窓の外は昨日とは打って変わって青空が広がってはいたが、心が躍るような気持ちはしなかった。

目が覚めた時、全てが夢だったと笑えればよかった。しかし目の前に広がる景色が、豪華な部屋がこれが現実なのだと訴えているようだった。

「おはよう、ございます」

辛うじて出した声は、冬特有の乾いた空気の所為で酷く掠れていた。朝一番に高貴な姫君がどんな風に振る舞うのかも知らないが、少な

くともイルゼは細かい事は気にしていないようだ。

「昨晚は冷えましたが、よくお眠りになれましたか？」

「はい」

これは嘘だったが、咄嗟にそう言った。

殆ど食べた気がしない晚餐を終え、部屋で一人きりになった途端言
いようのない不安がセシリアを襲った。

ただ頭を過るのは父と母のことばかり。突然いなくなったことを2
人は心配するだろう。

誰一人としてセシリアが森に入ったことを知らないし、ましてや隣
国に連れて行かれたのだと誰が思うだろうか。

目を閉じればそのことで頭が一杯になるし、逆に目を開けていれば
豪奢すぎる部屋に落ち着かない。

それに王を名乗ったあの男が、いつ扉から剣を持って入って来るか
と思うととてもじゃないが目を閉じる気にはなれなかった。

そんなことないと否定しながらも、心のどこかで王を恐れている。
暗闇がさらに疑う心を強くする。

結局セシリアが寝つけたのは空がうつすらと明るんできた頃だった。

「今日は珍しく晴れましたので、外に出るには絶好の日和かと存じ
ます」

「外？」

「王と温室へ出かけられるのでは？」

「あ…」

喉にいいと渡された薬草の匂いのするお茶をうっかり落としそうに
なる。

そうだ、と昨日の晩のことを思い出す。あまりにたくさんこの

とが起こった一日だった為、セシリアにはその約束が随分前のように思えてしまった。

既に今日着る為のドレスは決まっているらしく、イルゼの他に数名の侍女が薄桃色の春らしいドレスを長椅子に横たえている。

同じ色の靴とドレスに合わせた白い厚手のショールも用意されており、一体全てを着るのにどれほどの時間を要するのかセシリアには想像できなかった。

温かい湯で顔を拭かれ、絡まった髪も丁寧に梳かれる。全ては侍女の仕事なのだが、それらすべてを自分でやる習慣を持つセシリアには手持無沙汰になってしまい必要以上に何度も外を見ては、侍女たちに注意をされた。

やがてイルゼが髪結い道具を持って現れた時には、感じたことのない疲れが全身を支配していた。

髪を結いあげ美しい真珠を散りばめようか、それとも編みこんでしまおうかとイルゼが呟くのをぼんやりと聞いていたセシリアだったが、昨日王が言った一言が急に頭を過る。

髪は下していた方が似合うな

「あいつ、イルゼさん！」

結局、編みこんでリボンをつけることに決め一房髪を持ったイルゼにセシリアが声を上げる。

「どづかいたしましたか？」

「あの…髪は結われないで欲しいんです」

別にあの王に言われたからじゃない。いつも下していたから、そっ

ちの方が楽なのよ。セシリアはまるで言い訳でもするかのよう
の中で呟いた。
鏡越しに微笑んだイルゼにはどう捉えられたのかは分からないが。
それでも彼女はセシリアの意向を充分に反映して、少量の髪だけを
リボンで留め後は背中に流してくれた。

*

一人で軽めの朝食を終え、イルゼに連れられて行った場所は回廊の
途中であった。

城から温室まで続くそれは、造り自体は簡素であったが白亜の石を
積み重ねたものでとても美しい。よく見れば柱の一本一本に違う彫
刻が施され一日あっても全てを見終わることはできないだろうとセ
シリアは思った。

興味深げに柱を見ているセシリアに、イルゼはこの柱はブルサルト
の建国記を表したものだと言った。

「建国記、ですか」

「ええ。私はこの国の生まれではないので詳しくは存じ上げませ
んが」

「えっ？」

驚きのあまり、足が止まる。それに気付いたイルゼは少し困ったよ

うな顔をしてセシリアを振り返った。

「私は5年ほど前まで南に存在していた小国の出身なのです」

「それは：ブルサルトに攻められて、国がなくなってしまった、ということですか？」

「まあ！攻めるだなんてとんでもございません。ジェンサー様は私たちの国を守ってくださいだったのですわ。今はブルサルト領となっておりますが、ほぼ自治区です」

国を守る？

セシリアが今まで聞いてきたブルサルトのイメージとは大きく違う。ブルサルトは小国に攻め入っては略奪を繰り返していると聞いている。それがイルゼの話だとまるつきり逆だ。

「王は決して豊かな国は攻めません。私の祖国は、5年前までとても酷い有り様でございました。愚王の下で行われる腐敗した政治、国民は飢えに苦しんでいてもそれを主張することすら叶わなかったのです」

その当時のことを思い出し、イルゼは下唇を強く噛んだ。

今でも鮮明に思い出すことのできる苦しい暮らし。比較的裕福であったイルゼの家ですら使用人への給与を払うのもやっとであった。

それより下級の 特に農民などはその日の食事にも事欠いていたことだろう。

しかし愚王は国民に更に重い税を課しては己の欲望の為に費やしていた。何人もの人が国王に直談判をしに城へ行ったが、帰ってきて者は誰もいなかった。

つまり王は国民に意見すらも許してはくれなかったのだ。

ジェンサーがイルゼの国に攻め入らなければ、とつくに国は滅び別の国の下で同じような苦しみを味わっていたかもしれない。

今、イルゼの国は少しずつ豊かさを取り戻している。立派な首相の下で平等な政治が行われ、国民一人一人の安全もブルサルトが盾になってお陰で保障されている。

「大切な家族や友人の未来を守ってくださった王への恩は…一生をかけても返すことはできないのです」

噛み締めるような言葉に、セシリアの心は揺れ動いた。

今まで聞いてきたブルサルトの噂は全て事実とは違っていたのかもしれない。実際ジェンサーは聞き及んでいたほど残酷ではなかったし、セシリアに対しても決して高圧的ではなかった。

イメージばかりが先行してしまい、知ろうともしなかったが 本当はブルサルトの王はセシリアが思っているよりもずっと素晴らしい人物なのかもしれない。

呆然と言葉を紡げずにいるセシリアに、イルゼは明るく切り出した。

「つまらない話をしてしまいました、申し訳ございません」

「いえ…そんなことは」

「まあ、王が待つておられますよ。私が付いていられるのはここまですででございます。どうぞ楽しい時をお過ごしくださいませ」

少し先に、柱に寄りかかるようにしてジェンサーが立っていた。

セシリアの姿を視界に捉えると、ゆっくりとこちらに向かって歩いてくる。

遠目には昨日と同じように全身黒い服に見えたが、陽の光に当たるとそれがとても深いグリーンだということも分かった。そしてその色はジェンサーの黒い髪や瞳によく合っていた。

ジェンサーが歩くたびに腰に差ししている剣が揺れる。飾り用のものではないことはその太さですぐに分かった。闇色の鋭い瞳はしかし、とても柔らかい光を湛えているような気がする。

セシリアは知らず知らずのうちに自分からジェンサーへと近づいていた。

「お待たせしてしまつてすみません」

「いや。私が早く着きすぎたのだ。気に病む必要はない」

ゆっくりと視線を上げ、セシリアは正面からジェンサーの顔を見る。セシリアの身長だとジェンサーの胸元を見るので精一杯だったからだ。

王に相応しい立派な装い、広い肩、首筋、すつと通った鼻筋に黒の瞳。風に揺れる髪はきつと硬質に違いない。

表情というものはないが、不思議と怖いという感情は湧かなかつた。

知りたい、とセシリアは思った。この人のことをもつと知りたい。

「あの…陛下」

「ジェンサーで構わない」

「…ジェンサー、様」

戸惑うように零れた自分の名前に、ジェンサーは胸の奥が震えるのを感じていた。

今日のセシリアの装いはシンプルな薄桃色のドレスに、髪は後ろに流されている。昨日ジェンサーが褒めたからだと自惚れるつもりはないが、そうであつたらいいと願つてしまふ。

亜麻色の髪はきらきらと太陽の下で輝き、さながら未だ厳しい冬の中にいるブルサルトに訪れた小さな春のようであつた。

感情のままに連れ去ってしまったことはすまないと思っている。昨夜彼女がなかなか寝付けなかったことは、隣りから聞こえる微かな物音で知っていた。

見知らぬ土地で見知らぬ場所で、突然名前も知らぬ男に妻になれと言われたセシリアは一体どういう気持ちで一夜を明かしたのか。晚餐の時に少しでも彼女の気が紛れればと温室へ誘ったが、余計に不安感を与えてしまったのではないかとジェンサーも大した睡眠は取れなかった。

長い戦の経験で、少ない睡眠でも生活に支障は出ないがさすがに今朝は朝議もそぞろに出てきてしまった。

後でアルフォンスから小言を並べられると思うと気が滅入ったが、回廊を侍女と歩いてくるセシリアを見つけた時にはそんなことはどうでもよくなっていた。

幼馴染の男のように気のきいた言葉でセシリアを喜ばせる術を、ジェンサーは知らない。

しかし、翡翠色の瞳が自分を見つめていると思うだけで衝動的にその細い肩を抱きしめてしまいそうになる。

一国の王として、また軍人として人より多めに理性を持ち合わせていると自負していたが…それはセシリアの前では全く役に立たないことを知った。

けれども突然抱きしめて彼女を怯えさせるわけにもいかない。ジェンサーは拳を強く握ることでその衝動を必死で誤魔化そうとした。

「…温室に案内しよう。私の母が建てたものなのだが、なかなか広く全てを見るには時間がかかる」

少々早口で紡がれたぶっきらぼうな言葉。

だがセシリアは自然と、ジェンサーに笑顔を向けていた。

「はい。とても楽しみです」

素早くセシリアから視線を逸らしたジェンサーの拳が、さらに固く握りしめられていたことは言うまでもない。

*

ジェンサーに案内され入った温室は、一面ガラス張りできていた。太陽の光が燦々と降り注ぎ、冬であることをすっかり忘れるような陽気に満ちている。

天井まで高く伸びた着や、セシリアの足元に咲く色とりどりの花々。セシリアが見たこともないほど色は濃く、鮮やかであった。

幾度となくジェンサーに花の名前を尋ねてはみたが、ジェンサーには分からないらしく、「…南国から取り寄せたものだ」とだけ返答が返ってきた。

「もしかしたら図書館に蔵書があったかもしれない。後で司書に言っ
つて取らせてこよう」

「いえ、そんな皆さんの手を煩わせる訳には…」

「構わん。皆そなたの為なら喜んでするだろう」

ジェンサーの言っている意味はよく分からなかったが、せっかくの好意だ。時間のある時で構わないと念を押し、頼んでみることにした。

南国から取り寄せたという花は一樣に甘い香りがする。蜜を絞って

香水にしたら、きっと素晴らしいものができるだろうとセシリアが零すと、ジェンサーはすぐに「やってみよう」と言いだしたのでセシリアは慌てて首を振った。

「そんなつもりで言ったんじゃないんです」

「迷惑か？」

「いいえ！お気持ちはとても嬉しいです。でも温室にしか咲かない貴重な花を、そんなことで無駄にしてしまうのは勿体ないと思うんです」

ジェンサーは奇妙な顔でセシリアを見つめた。

てつきり喜んでくれると思ったのだが、セシリアは花が可哀想だと言う。彼女の為ならいくらでも南国から取り寄せるつもりでいたのだが、それも断られた。

どうしたら喜んでくれるのか分からない。さっきのような笑顔をもっと見たい。

「ならどうしたらいいのだ」

おもわずそう口走っていた。我ながら愚かな質問だと思う。

一度あの笑顔を見てしまったら、もう一度と求める気持ちが強くなる。微かな感情で充分であった筈だ。初めはただ、その目に自分を映してくれるだけでよかった。なのに

「またここへ連れてきてください。それで充分です」

そなたは私が欲しいものを容易く与えてしまうから。
だから更に貪欲になってしまふのだ。

ジェンサーの母親が造ったという温室は一室だけではなかった。南国の間、春の間、白の間、常緑の間と東西南北4つに分けられ、それぞれの美しさでセシリアの目を楽しませた。

部屋の隅にある2重のガラス張りのドアをくぐれば4つの部屋を行き来することができ、ガラスの向こうに見える景色に胸が躍った。春の間はケンティーフォーリアでもよく見かけられることがある淡い色の花を中心に控え目だが温かみのある植物で彩られている。セシリアの村では滅多に生えない珍しい花を見た時はおもわず駆け寄りにはいられなかった。

白の間は文字通り白い花で埋め尽くされていた。大きさはさまざまだが、花の放つ清純な雰囲気は溜め息が零れる。

常緑の間は花らしいものは一つもなく、色々な方向に伸びた木が天井を覆い地面を這っていた。森の奥深くを再現したというそこは、本物の森と同じように鳥が囀り、ウサギが跳ね、木の実が落ちていく。

ドアを開ける度に別の世界へ入ってきたような不思議な感覚に、セシリアは胸をときめかせた。ジェンサーはそんなセシリアの次々と変わる表情を満足そうに見ている。

戦の厳しさも長い冬の冷たさも知っているが、このように温かく優しい感情は覚えがなかった。例えばジェンサーが固い氷なのだとしても、セシリアはその氷を溶かす柔らかかな春の光。一度でもその温もりを知ってしまえば、知らなかった頃には戻れない。己の身勝手な行動すら肯定してしまいたいそうになる。

だからだろうか。セシリアに伸ばす指先が彼女に触れることはない。伸ばしては引き、決心しては躊躇い。その繰り返しは最強と恐れら

れる軍を率いる王としては些か情けない。

だが今は隣に並ぶことが精一杯だ。同じ速度で歩くことは難しいが、同じ歩幅で見ている景色を分かち合えるのは悪くはない。

綺麗だ、とセシリアが喜ぶ度に母が気に入っていたこの温室が初めて美しいと思える。薬になる植物ならまだしも観賞用の花などと倦厭していた自分からは想像もつかない。

「ジェンサー様？」

不思議そうな顔でこちらを見るセシリアに何でもない、と返す。

「セシリア、髪に葉がついている。取ってやるから動くな」

ジェンサーの言葉に恥ずかしげに瞳を伏せるセシリアに、心の中で謝罪した。葉などついてはいない。ただ　そう、ただ触れる口実が欲しかっただけだ。

ゆっくりと手を伸ばして自分のとは違う亜麻色の柔らかい髪を撫でた。指通りがよく、すぐに指先は髪の間を通り抜ける。

一瞬の触れあいであったが、ジェンサーには充分だった。本来なら生涯目にもすることもないだろうと思っていたくらいだから。指が離れると同時にゆっくりとセシリアが顔を上げる。

取り繕うようにわざとらしい咳をした。

「まるで太陽のような髪だな。ブルサルトでは珍しい色だ」

「ありがとうございます。母と同じ色だから一緒に褒められているみたいで嬉しいです」

本当に嬉しそうに言うセシリアにジェンサーの頬も知らず知らずのうち緩む。　傍から見ればただの無表情だったとしてもだ。

「ジェンサー様の髪は先ほど見た南国のお花の色ですね」

あまりに思いもよらないセシリアの言葉に彼女に合わせていた歩みがぴたりと止まる。

確かに最初に見た南国の間には黒い花があつたが……

今まで彼を形容するのに一番使われたのは闇だ。闇色の武王、それがジェンサーの強さをもっともよく表している。全てを飲む込む光りなき闇に他国は怯え、ブルサルト国に跪く。

そんな恐れられている王の髪色を誰が花に例えるというのだろう。少なくとも外見が花とは似ても似つかないことぐらいは大陸中が知っている。

しかし、ジェンサーはセシリアの突飛な言葉を全否定するつもりもなかった。なぜなら、強ち間違っていないような気もしたからだ。

「そなたの答えをアルフォンスが聞いたら卒倒するだろうな」

「お気に召しませんでしたか？」

「いや…悪くはない」

花は太陽なしでは生きられぬのだから。

「セシリア、ここは足場が悪い。手を」

「はっ、はい！」

差し出した手に躊躇いがちに重ねられた手。自分のそれよりもはるかに小さな温もりが、愛しくて仕方なかった。

「本当に一緒に来てしまつてよかったのか？ルアン」

深くフードを被ったアドニスが頭一つ小さな少年にそう尋ねた。灰色のローブからちらちらと見える赤毛の彼はアドニスの言葉に「二もなく頷いた。

「いいんだ。セシリアのすぐ近くにいたのに、俺は何もできなかった」

昨日の事を思い出すと自分がひどく情けなかった。全身黒ずくめの男たちに攫われるセシリアを目の当たりにしたというのに、自分の足はまったく動かなかった。

毛並みのいい馬に成人した低い男の声。村のものではないと分かった時点で彼女を庇う為に出るか、すぐさま村の大人たちを呼びに行くべきだったのだ。結局ルアンがその足を動かすことができたのは彼らが去つてから暫く経つてからだだった。

セシリアがいた場所にはバスケットと甘い匂いのする菓子散乱していた。

どうしてと、自分を責める言葉ばかりが頭の中を何度も巡る。だからセシリアの両親が彼女を連れ戻すと言った時、自分もついで行くことと固く決めたのだ。

「あなたの所為じゃないわ、ルアン。それにあなたが知らせてくれなかったらもつと大変なことになっていたかもしれないわ」

村一番の美しさだと評判のセシリアの母、エリザはそう言ってルア

ンを慰めてくれた。彼女の仕草一つ一つは村にいるには勿体ないほど洗練されている。対する父親のアドニスと体格も、村で畑仕事をしているだけでは到底成り得ないほど立派である。

2人はセシリアが攫われたと知るが否や、馬を連れて村を出ていこうとした。詳しい理由は分からないが、この2人には何かセシリアが誘拐されたことに関して知っていることがあるのかもしれない。単なる好奇心ではない。セシリアを助けたいと心から思うルアンにとって2人に着いて行かない理由などどこにもなかった。

「ところでおじさん、これは王都へと続く道だよな？」

さりげなさを装って聞くとアドニスは気まずそうに頷いた。

「ああ」

「お二人にはセシリアが連れ去られる心当たりがあるのか？」

それ以上はアドニスは答えてはくれなかった。

春祭りを控えているとはいえ、時折3人の間を通り抜ける風は未だ冷たい。隣国との国境に近い為、冷たい北風が混じっているのだ。ルアンはローブの前を掻き集めた。これで少しは寒さをしのげるだろう。

馬には荷物を乗せている為、3人はひたすら歩いた。普段家の畑仕事を手伝っているルアンや筋力がありそうなアドニスとは違い、華奢なエリザには多少なりとも過酷な筈だ。

アドニスもそれが気になるのか頻りに彼女のことを気にして、歩く速度を緩めるがそれに気付いたエリザに嗜まれてしまう。

「あなた、私は大丈夫。一刻も早く王都へと向かわなくてはいけないのよ」

「しかし」
「アドニス」

なおも躊躇っているアドニスにエリザがきつい視線を投げかけると彼はもう何も言わずに黙ってエリザに従った。

見た目はおっとりとしているエリザだが、怒るとアドニスよりも強くなるのか？ルアンは心の中で噴き出した。

それにエリザより数歩遅れて歩くアドニスの姿は、まるでお伽噺に出てくる姫君を守る騎士そのものだからだ。つんと顎を上げて歩く美貌の姫と、従順な騎士。

2人も着ている者は農民の服でアドニスが腰に下げている剣は農民でも護身用に許されるあまり切れ味のいいとは言えない錆びた剣だが、あまりにぴったりな光景にルアンは笑いを押し留めることができなかった。

エリザがきよんとした顔を向ける。

「あら、ルアン。どうかしたの？」

「いや、2人がまるで姫君と騎士みたいに見えたから」

アドニスとエリザは互いに顔を見合わせて笑った。そしてその口から、ルアンが驚くような事実が零れた。

「私たちもまだまだのようね、アドニス。私演技には自信があっただけね」

「いえ、こうして16年も普通に過ごしてきたのですから、私たちの腕もなかなかのものだったでしょう。エリザベス様」

「は？」

「これから知っておいた方が色々都合がつくから話してしまうわね。何を聞いても驚かないでいられる？」

生憎とそんな自信はなかったが、ルアンは頷いた。ルアンをエリザはまっすぐ見る姿はまるで高貴な方のように凜としていて、おもわずごくりと喉が鳴る。

「私の本当の名前はエリザベス・メイアン・マールバラ。セネット公爵の長女よ」

「そして私は元王宮騎士団副団長だ」

セネット公爵の長女と元王宮騎士団副団長　？

生まれた時から村で生活しているルアンにはいまいちぴんとこないが、それなりに地位もある肩書きなのだろう。

そういえば昔王都で生活していたことのある伯父にミドル・ネームを持つことを許されるのは貴族だけだと聞いたことがある。それに王宮騎士団と名がつくからには直接王を守ることもあったのだろう。

2人の思わぬ真実にルアンはただ呆然とすることしかできなかった。

しかし、そのセネット公爵の長女と王宮騎士団の副団長がどうしてそれまでの生活を捨てて辺境の地で生活してきたのだろうか。

ルアンの心に新たな疑問が湧き上がる。それを察したかのようにエリザ　エリザベスは悲しげに目を伏せた。

「それがセシリアが攫われた理由よ」

「一体、どういう…」

「私にはもう一つ、肩書きがあるのよ」

声が震えて言葉にならないエリザベスの肩をアドニスが優しく引き寄せる。

「セネット公爵令嬢、そして元国王陛下の側室よ」

今やルアンの心臓は五月蠅いほどに鳴り、胸を圧迫していた。息を吸うことすらままならないほどの衝撃だ。
もし、いや今やほぼ確信となりつつあるが、もしルアンの考えていることが合っていれば。

「セシリアは王と私の間にできた娘よ　彼女は王家の血を引いているの」

それは最悪の結果に他ならなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5864o/>

春待ちの間

2011年8月13日22時05分発行